

## -2. 学びの森の風景

# 学びの森の住人たち（5）

- 学校でもない学習塾でもない、森 という学びの世界が投げかけるもの -

アウラ学びの森 北村真也



### 5. 「できない」ということ

ここでは「できない」ということに焦点を当てて少し考えてみたいと思います。

私たちは、日常生活の中で幾度となく何かに

つまづくことで「できない」という場面に出合いますし、悔しさや諦めなどの感情、あるいは劣等感を味わいます。できることならつまずきたくないし、ましてや自分の子どもには、つまずかせたくなくと思っています。でもその一方で、私たちはつまずいて初めてそれまでの自分の行動を振り返り、改めて自分自身と向き合い直す

という経験を持っています。つまりつまりくことが、自分自身を変容させる上での重要な過程となっていることを経験的に知っているわけです。

そしてこのことは、子どもたちの教育の現場にも大きな意味を与えます。つまり、「できない」ということは、そもそもネガティブに捉えるべき問題なのだろうか？ということであらためて再考してみる必要性がでてくるように思うのです。

ポストモダンへと突入していった私たちの社会は、ますます不透明感の様相を示しています。政治、経済、そして社会のあり方そのものさえもが流動性を帯びてきました。社会学者のG.パウマンは、そんな社会をリキッドモダニティ(Liquid Modernity=液状化する社会)と呼んでいます。このような液状化の中にあっては、あらかじめ設定した予定通りに物事を運んでいくことが大変難しくなってしまう。その過程でどうしてもつまずきが生じてしまう。つまずきながらも、いかにしてその時々最善の方法を模索できるかが問われてくるのです。だからつまずかないように子どもを育てるのではなく、つまずいてもそこから何かを学び取り、再びその課題を超えられる子どもを育てることが大事になってくるというわけです。つまりこの論点に立ち返る時、教育における目的が大きくシフトしていくことになるのです。

でも一方で、子どもたちが何かにつまずき「できない」という思いを抱くことで、その課題から逃げようとしてしまうこともよくあることです。「どうせやってもできないし...」とか、「そんな大変なことしたくない...」とか、その

理由は様々あるものの「できない」=「あきらめる」という短絡的なロジックが横行していることは疑いようのないように思います。

だからアウラでは、初めてやってくる子どもたちの中にある「できない」=「あきらめる」というロジックをいかにしてポジティブなもの、つまりつまずきを通して自分自身と向き合い課題を克服していくというロジックへと書き換えるかということに意識がおかれるわけです。すべては、そこからしか始まらないからです。

### できないことに向き合う

自分ができないことを引き受けること、自分の嫌なところと向き合っていくことは、誰だって勇気のいることです。でも一旦それを引き受け、そこに向き合っていくことなしに変わっていくことはあり得ません。多くの子どもたちは、このことを共通の課題として持っています。でも本当に大切なことは、私たちおとなも彼らと同じ課題を持っているということです。だからこそ、私たちは彼らと理解しあえるのだと思うのです。

中3のS子は、その日も大量のプリントを自宅で作ってきました。内容は中2数学、今まで他の塾に通っていたのですが、ただ通っただけで自分ができていないところに向き合うこともせず。できていないことをごまかしながら、S子は中3になっていました。彼女の妹がこの4月からアウラにやってきたことをきっかけに、母親がS子をアウラに連れてきたのです。

アウラでは、体験入学の日に生徒に対してまず今の理解度をチェックします。入塾に際してテストを課すのではなく、その生徒の学習プログラムを立てるのに、まず現状把握が必要だと考えるからです。

「わからないものは、そのままでもいいし、まずやってみて。S子ちゃんのありのままを知りたいから...」

私は、そうやってS子にプリントをやってもらいました。その結果は、深刻なものでした。中2までの基礎計算が2割ほどしかできていません。

「Sちゃん、これじゃいくら今学習しているところができるでも、テストで結果が出ないでしょ。やっても、やっても、正解にならない。だから、まず正解率を上げるために復習が必要だと思うよ。どうする？復習からやってみる？」

「はい」

言葉少なに、S子は頷きました。そして、その日は復習プリントをやってもらいました。体験終了後の面談で、私は彼女の母親にS子の理解状況をありのまま伝えました。お母さんは一刻も早く今の塾を辞めさせてアウラに彼女を来させたがっているようでした。しかし、彼女は躊躇します。アウラに来ることで、自分ができていないことが暴露されるからです。そしてそれから1週間、S子の家からの連絡はありませんでした。

「ようやく納得してくれたようで...」

S子の母親から連絡が入りました。

「いやもう来ないかと思いました。彼女にとっては、自分ができないということと向き合うことはとても勇気がいることだ

と思うんです。でもそこを引き受けないと、できるようにはならない。それは、仕事だって同じことでしょ。その勇気が、子どもを変えていくんです」

私はそんなことを、母親に話しました。そして次の週から、S子はアウラにやってきました。まずは彼女が最も苦手としている数学のみを徹底的に学び直し、そこで少し自信を得てから、他の教科も学び直しをしていくことを私は提案し、彼女の学習は始まりました。

「すごいね。初めてきた日にやった時は2割しかできなかったプリントが6割もできるようになってるやん」

S子は、その日2時間たっぷり学習し、初日にやったテストに再び挑戦しました。結果は6割の正解でしたが、私は彼女の進歩に注目します。「やればできる」という自己肯定観や自信が今の彼女には最も必要なことだと考えるからです。

「はい」

相変わらず言葉少ない彼女の反応でしたが、明らかに彼女の表情は変化していました。それから私は、家でも学習することを勧め、約1ヶ月半で学び直しを完了させることを提案しました。S子は、その提案に対しても嬉しそうな表情を見せていました。そして毎回、彼女は大量のプリントを家でやってきては、嬉しそうに私に見せてくれました。

「S子ちゃん、えらいね」

「はあ？」

「S子ちゃんは、自分の一番人に見られたくない部分に向き合っているから...。数

学は本当に嫌だったでしょ。できないことを誰にも知られたくなかった…。いつも適当にごまかし、そこに注目してほしくなかった。私は、そんなS子ちゃんの気持ちがよくわかる。それは私だって同じだから…。誰だって、自分のできないところや、自分の嫌なところは、隠したい。誰にも見られたくない。そう思っている。でも、そこに一旦向き合わないと、それは克服できない。でも、一旦そこと向き合い、それを克服することができれば、大きな自信となって返ってくる。それは、苦手なものであればあるほど大きな自信になる。S子ちゃんは、今、その最中にあると思うんや。だから私は、すごいなって思っているんや…」

「はい」

S子は、うっすら涙を浮かべながらも私の方をしっかりと見つめてそういいました。

「できないこと」に向き合うことは、他人に見せたくないところ、いや、自分自身にとっても見たくないところを見ることかもしれません。それは、子どもにとっても嫌なことでしょうし、私たちにとってもできればしたくないことかもしれません。

S子は躊躇していました。1週間という時間は、彼女にとっての葛藤を表現していたのかもしれない。そして彼女は決心するのです。他人に見られたくない自分自身の恥部をあえてオープンにし、そこを一步ずつ自分の足で踏みしめながら歩き始める決心です。そしてこの決心から先は、彼女の歩いた分だけが進歩になります。「何がまだできないの？」ではなく「何ができるようになったのか？」に焦点を当てるだけで自然と課題解決へS子を導いていくことがで

きるようになります。

ここで大事なことはS子の中でのモードの変化です。自分に自信がなくてできないことをひとしきり隠し続けようとしてきたS子。隠し続けようとする限り彼女はますます自分に対して自信が持てなくなっていました。そしてあの沈黙の1週間。この1週間という時間の中で彼女のモードが変容するのです。そこからは、彼女の小さな一歩が自信へと置き換えられるようになったのです。つまりこの変化はたまたま数学という教科を媒介にして生じているのですが、彼女が自分自身と向き合い始めたことで、それは彼女自身のパースペクティブそのものを変容させていたのです。まさにJ.メジローの言うパースペクティブ変容が生じた瞬間です。

### 私、アホやし…

M子は、今年の5月からアウラに加わった学校に行かない生徒です。

M子は、大変はっきりと自己主張できる子で、私の質問にも彼女なりの意見を聞かせてくれます。学習に対しても意欲的で、何とかしていきたいという意志をしっかりと持っています。ただ気になったのは、今までの蓄積された理解でした。

M子は、現在中学2年ですが、1年の内容は全くと言っていいほど理解されていませんでした。「勉強は嫌い」と本人は言っていました。ここまできれいに忘れ去られていたケースは大変珍しい。聞けば、1年の時は、塾にも通っていたというのです。それにしても、これでは、今の学年の

内容に取り組んでも全く理解できないでしょう。私はM子に、もう一度1年の最初から学び直しをすることを勧め、彼女もそれに納得してくれました。

私は、彼女の数学を担当していますが、その後の彼女の進歩には目を見張るものがありました。正負の数の足し算から学び直して、2週間ほどで1次方程式の計算までできるようになっていきました。私はできるだけ、短期間に学年相当の理解まで到達できるように、基本の演習を中心に学習プログラムを組み立てました。

「M子ちゃんすごいやん。最初は、正負の数の足し算もほとんど間違えていたけど、今では、ほとんど正解や。あと、1年の内容は、こことここだけやっておこう。それ以外は、飛ばして2年生に行こう」

「これ飛ばしてもいいの？」

「いいよ」

「私、アホやし？」

「……」

M子のコトバに、私は一瞬コトバを詰まらせました。「私、アホやし？」そう彼女は、疑問形で聞いてきたのです。この私の一瞬のコトバの詰まりを、彼女はどう捉えたのでしょうか？相手が何を答えたかではなく、コトバとコトバとの間合いから、彼女はこれまでもいろいろなメッセージを受け取ってきたのかもしれない。

「M子ちゃんは、ほんの2週間前までアホやったかもしれん。でも、自分で自分のことを“これではあかん”と思ったから、

最初からやり直そうとしたんやろ。そして今、2週間前には全くできなかったことを、次々とできるようにしていつている。これって、アホなんだろうか...？」

「アホじゃないかもしれん...」

「M子ちゃんは、自分で自分のことを“アホや”と決めていたのかもしれない。アホやからわからないし、わからないから、練習もしない、練習しないから余計自分のことをアホやとってしまう...という、悪循環のループや。ひょっとすると、そんな風に思い続けてきたのかもしれん。でも、アウラに来て、それはほんの少しだけ変わってきた。数学の問題ができるようになったということではなくて、M子ちゃんの考え方が変わり始めた。自分で何とかしようと思い始めた。そうするとこの悪循環のループは機能しなくなる。このことが大事なんや。だからもう“自分のことアホやし”って思わんといて」

「わかった」

M子は、そうなづきながら私に返事をしました。毎朝、1日も休まずアウラにやってきては、ただひたすら5時間学ぶ彼女の姿に私はどこか力強さを感じていました。自分自身を変えるために、自分自身を生まれ変わらせるために、彼女はただひたすら学び続けるのです。

不登校だったM子は、その後、私立の進学校の特進コースへと進学していきました。アウラにやってきた当初の成績は、ほとんどが2でしたから、考えられないような変化です。実際、彼女の学校の校長先生も「君のようにこんなに短期間で力をつけた生徒は今までいなかった。

君は学校の歴史を塗り替えたんだよ」と言われたそうです。

M子にとっても「できない」ということが「アホ」という自己イメージに直結していました。だから、「できない」ことが「できる」ようになることは、自己イメージの更新を意味することでした。私たちはM子の学習に日々付き合いながら、彼女の自己イメージの変化を観察していたのです。

ここに異なる階層で並走する2つの指導のコンテクストがあります。G.ベイトソン流に言えば、メタログ（Meta-logue）という表現になるのですが、ここではメタなコンテクストがとても大きな意味を持っているのです。そこで彼女の変容が成立することで大きな変化が生じていくことになるわけです。

### プラスの貯金

「学校に行きたくても行けない」中学生の不登校の場合、そんな風を感じている生徒が大変多いように思います。中学3年になったばかりのH子もそんな中学生でした。バレーボール部に所属していたH子は、クラブ内の人間関係のもつれから、クラブを辞めざるをえない状況に追いやられ、9月に退部をしました。しかし、同じクラブに所属する友達が同じクラス内にいたことから、クラスにも入りづらくなり、しかもクラブの顧問が担任だったこともあり、ますます学校に行けなくなってしまいました。

それから7カ月、彼女はその大半を家

で過ごすことになりました。学年が変わりクラス替えがあった時には、学校へ行こうと決心したものの、身体が動かない。やっぱり無理ということで、自分でフリースクールをインターネットで探し始めて、アウラを見つけたそうです。

「学校へ行きたくても行けないんです」

「どうしてなんだろう？」

「みんなジロジロ見る気がする...」

「なるほど、それはHちゃんだけじゃなくて、今アウラで勉強している中学生もみんな同じことを言ってたよ。そんなみんながジロジロ見ることなんてないんだけど、みんなそう思うんだ。でも、そう思ったら、Hちゃんにとってもそれが事実になっちゃう」

「はい」

「もっと、自信がいるんだよね。Hちゃん勉強は、学校に行かない間やってた？」

「いいえ、全然」

「じゃ学校に行ってる間の勉強はどうだった？ ついていけてた？」

「勉強が苦手で...」

「そうなんや、じゃなおさら、このまま学校へ戻ってもついていけないかもしれんな」

「ここは、学校じゃないから、Hちゃんが来なければこればいい。絶対来なくちゃいけないということはない。いいね。“学校へ行きたくても行けない”っていうのは、自信がないからだと思う。人間、自信をつけようと思ったら、プラスの貯金がいる。たとえばアウラに来ることになれば、朝も早く起きる。身支度もしないといけない。

電車とバスに乗らないといけない。毎日 5 時間集中して勉強しないといけない…。そんなことはみんな H ちゃんにとって新しい経験になる。それがプラスの貯金になると思うんや。自信がないっていう状態は、何も H ちゃんだけじゃない。大人だっていっしょ。私だって、お母さんだって一緒。新しいことに踏み出そうと思うと、誰だって自信がなくなる。だから“やりたくてもやれない”状況になる。そんな時は、プラスの貯金をしないとイケないんだ。自分がこれから変わっていくための貯金」

私は、そんなことを H 子との最初の面談で話しました。一通り彼女の気持ちを受け止めながら私なりの提案を投げかけていきました。そしてお母さんにもお聞きになりたいことがあるかどうかを尋ねました。

「アウラに通わせていただければ、学校の出席認定になるんですね」

「出席認定にならなかった学校は、今までありません。それに通学証明も学校で出すことになっていますから、通学定期も購入できます。学習評価も、多くの学校で評価が実現しています。ただ評価については、学校長の権限ということになっていますから、最終的には、各学校の判断です」

お母さんは、H 子の今後の進路のことを心配されているのでしょうか、そんな質問を私にされました。

「私が不登校の子どもたちを指導してきて、一番大切に思っていること。それは、彼らが“不登校になってよかった”とってくれることです。不登校になると、みんないろんなことを考えます。これまでの生

活を振り返ったり、将来の生活について考えたり、あるいは、自分の性格や友達関係のこと、さらには生きることの意味なんて哲学的なことまで考えたりすることがあります。そうよね H ちゃん？」

H 子は、私に向かって頷きました。

「こんなことは、不登校にならないと考えなかったことです。今までの自分自身を振り返り、これからの自分自身を考える絶好の機会を不登校という経験がくれたのです。私は、子どもたちにそう思ってもらいたいと思って指導を続けています。人生に無駄な時間はないのです。すべては意味のある時間であり、意味のある経験なんです。大切なことは、その意味を理解すること、私はそう思っています。そしてこのことは、お母さん自身にも当てはまります。自分の子どもが学校へ行かなくなって初めて考えさせられたことがたくさんあるはずです。それは、つらかったこともあるでしょうが、そこから得たものもたくさんあったはずです。それらはみんなこれからの人生の肥やしになっていくものです。そう、プラスの貯金になるものです」

お母さんは、目頭を押さえながら私の話に頷いておられました。

こうして H 子の初回の面談は終わりました。もう一度家に帰ってよく考えてもらいたいアウラでやっていきたいということになれば、体験の申し込みをしてもらうことになっています。

不登校の子どもへの初回面談、その場面で私は「プラスの貯金」というメタファーを使いました。プラスの貯金とは、自分に対する自信の

ことです。不登校の子どもたちの多くは、きわめて自己イメージが低いのが共通した特徴です。そしてさらには、子どもが学校へ行かないという状況が、親子関係においても様々な課題を作り上げてしまうのです。そしてその結果、親子関係そのものも子どもの自信を奪い取ってしまいがちになってしまうようです。

そこには一つのシステムがあります。学校に行きたくても行けない自分自身を否定し、家に引きこもれば引きこもったで、そうしかできない自分自身を否定し、親子で言い合いをすれば、親に心配をかけてしまう自分自身をまた否定してしまうのです。あらゆることが、自己否定へとつながってしまうようなシステムがそこにはできあがっているわけです。だから、それを一旦断ち切らないといけないのです。このことは、不登校の子どもたちの面談においてとても大事なロジックなのです。

その後、H子はアウラで学び始めるようになりました。そして1日の欠席もなく皆勤状態で卒業し、現在元気に高校生活を送っています。彼女のプラスの貯金が、彼女のその後の人生を切り拓いていったのです。

### 頭の中がごちゃごちゃになるんです

今度は、多動の男の子のエピソードを紹介します。とにかく物が片づけられないというK君でしたが、国語の学習を媒介にして家庭での片づけが大幅に改善していきます。何が起こったのか、お母さんも最初はわからない状況でしたがK君はどんどん変わり始めます。

小6のK君は、片付けが大の苦手という

男の子です。アウラでの初回面談で、お母さんに「何か気になることはありますか」とお尋ねしたところ、この片付けの話が話題に上がりました。ただ私の印象は、大きく違って大変礼儀正しい素朴な男の子というようなものでしたから、お母さんの口から出てきたコトバに私は少し戸惑っていました。

「とにかく自分の部屋もすごいんです。机の上も本とかプリントの山とかで...。学校の忘れものも多くて、とにかく大変なんです」

お母さんの口ぶりからは、結構大変そうな感じがうかがえ、K君もそれに頷いていました。私はK君に聞いてみました。

「お母さんの話では、K君の部屋は大変な状態になってるみたいだけど、そうなの？」

「はい」

「じゃあ、学校で使うプリントとか、よくなったりするでしょ？」

「はい、よくなります」

「不便だよね、そんな散らかったままじゃ...。どうして、そうなるんだろう？」

「何か、頭がごちゃごちゃになるんです。一つのことだけやってるときはいいんですけど、いくつものことをやらなあかん時に、ごちゃごちゃになるんです。そうしたら、いつの間にか...」

「そうなんや、じゃ、K君は、本当はちゃんと整理していたんや。でもいっぺんにいくつものことをやらないといけない状態になってしまっごちゃごちゃになるわけなんや」



「はい」

「なるほどな」

私は、K君に興味を持ちました。大変丁寧なやり取りと、対称的な片づけられないという行動パターン。そして彼なりに自分の状態を認知していること。お母さんは「多動」というコトバを出されていましたが、私は、そのラベルを受け入れようとは思っていません。K君を「多動」と私が認知した段階で見えなくなるものがあるからです。むしろ彼の口から出た表現。“頭がごちゃごちゃになるんです”これが出発点になります。

「私は教科の学習を通して、それぞれの子どもの奥にあるものを見つめます。きっとK君の場合は、片づけられないということが、その奥にあることなのかもしれません。片づけられないという状況が何を意味しているのか、あるいは片づけられないという状況を支えているものは何なのか、とにかく私はそのことに向き合うことになるかもしれません。「多動」というコトバ一つで片づけてしまうのではなく、その彼の状態をもっとよく観察することで、その奥にあるものが何なのかを知りたいのです」

こうしてK君の初回面談は終わりました。そして初めての体験日、彼は大変集中して丁寧に問題に取り組んでいました。そして彼の提出したプリントには、とても丁寧な字でその答えがつつられていました。

### 埋め込まれていく学び

モノが片づけられないとっていた小6のK君が、アウラで学習を初めて3ヶ月。今日は、初めてのお母さんとの面談でした。家で は、どんな変化が見られているのでしょうか。私は、それを楽しみにしていました。

「彼は、アウラで学ぶことを家でどんな風に言ってますか？結構楽しんで来てるでしょ？」

「楽しんでます」

「そうでしょ、楽しんできてますよね。そう思います。毎回、楽しそうにやってるしね」

「あの最初の時にお話した中で“モノが全く片づけられない”ということでしたよね。そしてそのことがあって...、ここではいろんなことを大変しっかりとやってますよ」

「確かに、ここにお世話になってから、変わってきたなというのは見えてきてるんですよ」

「どういう風に？」

「むちゃくちゃきれいにするというんではないんですけど、学校のものとは要らないものと今使うものに分けられるようになった」

「前はできてなかった？」

「もう、それはぐちゃぐちゃで...」

「ほー、あっそう。なるほどね。不思議ですね、国語だけを週に1回学習してるだけなんですけどね」

「もうほんまに、何でって思うんです...」

「お母さんの話では、ほんまにひどかつ

たんですね。家の中もぐちゃぐちゃで、何から手をつけていいかわからん状態やったようでしたよね。私も最初聞いてびっくりするくらい…。そして本人は、“すぐに頭の中がごちゃごちゃになる”って表現していた…」

「言っていました」

「だから、本人も訳がわからんようになっていたんだと思うんです。そして、国語を履修することを通して彼のその部分がどんな風に変化していくのか、それを見たかった。だから私の焦点はそこにあったわけです。“ごちゃごちゃになってしまう”という状態がどう変わっていくかを、国語を通してやろうという指導目標を立てたわけです。でも、国語のプリントとかとても彼はきちんとするんですね。私は驚いたんです。一度、見てやってください。それは、本当に感心するくらい間違い直しもきちんとしてるしね」

「そうですか…」

「まあ、見てください。彼のやったプリントを、“見せて”って言って…」

「見ました」

「きれいでしょ？丁寧に直せてるし…。読書の発表も起承転結をちゃんといれて、丁寧に発表するんですよ。彼は、日本の歴史にこだわりがあるようで、そればかり読んでますけど…」

「そう、歴史がおもしろいみたいです」

「それを、“こうなって、こうなって”って、実に丁寧に話してくれるんですよ。だからここでの彼の様子を誰に見せても、“きちんとした子だね”って思われるだろうし、まさか今までモノを全く片づけられなかった子どもだったとは想像もつかな

いと思いますよ。まあある意味、多動的な行動があるとか、誰にも見えないだろうなって思うんです。だから、あの…、不思議やなって思うんですよ。でも少なくとも、週に1回は、そんな様子で学習に取り組むでしょ、それが彼の日常のごく一部ですけど、彼自身の中に埋め込まれていくんでしょうね。だから当然日常の生活の中にも変化が現れる…」

「あんまり言い過ぎた部分もあるのかなって、私が…。“片付けなさいって”とか“早くしなさい”とか、この人少し参ってたこともあったから…」

「それもあやろね…」

「だから、言わないようにはしてますけど…」

「褒めてあげることが大事かもしれないですね。まああんまり何も言わなくて、逆にうまくやれている部分を褒めてあげるといふ…。やっぱりそれがすごくいいと思います。私は彼に対しては、よく褒めているわけですよ。“すごくきちんとやれてる”とか、“ていねいにやれてる”とかね、まあだから、あえてそういうポイントで褒めている。何点やったとか、そんなことあんまり関心を示さないんですよ。そんなことより、きちんと上げられることの方が大事、そこに私の意図があるんですよ。そこにね…。それは、先も言ったように、彼への指導目標をそこにおいてるのでね、ぶれないんですよ。教育って奥深いんですよ。それで、大変知的な作業なんですよ。これってね…、見えないところでいっぱい絵を描くんですよ。そしてそれを彼とのやり取りの中で表現するだけの話なんですよ。まあ、でも今のお母さんの話を聞いて、

私はうれしいですよ。それだけ彼はどうしようもなかったわけでしょ？何をやってもなかなか改善されなかったわけでしょ？」

「何回も学校へ行って相談したんです」

「ねえ、もっと早くアウラに来られたらよかったのにね。手品のように動くわけですよ。教育のすごさですね。ということは、お母さんにとっては結構満足ですね」

「それはもう、大満足です」

「それはよかった」

「少しずつ変わってきたのが、目に見えるようになってきましたから...」

「まあ、それじゃそういうところを褒めてあげてくださいね」

「できないところ」は、人が変わっていくときの転換点かもしれないと思うことがあります。だからそれをいつもネガティブに捉えていては、その変容が生じてこないのです。あの職人的な催眠療法家であったミルトン・エリクソンがどこまでも深い観察によって鋭い技法を生み出したように、その「できない」というポイントにこそヒントが隠されているように思うのです。

そしてエリクソンの技法とベイトソンの理論が大きな源流となって誕生したブリーフ・セラピー(短期心理療法)。そこには、家族療法、NLP、そしてソリューション・アプローチなどが展開するわけですが、それらに共通して見出すことのできる概念として、リフレーミング

(Re-framing)というものがあります。「できない」ということに関しての自己否定感へとつながるネガティブなフレームを自信へとつながるポジティブなフレームへと置き換えていくこと。そうすることで「できない」ということにかか

わるシステムそのものが変容していくことを私たちは経験的に理解しているのかもしれませんが。

アウラの森では、日々日常のやり取りの中でこのようなフレームの書き換えが起こっています。それは私たちと子どもたちの間にのみ起こるのではなく、私たちと親たち、そしてさらには親子の間でも生じていきます。まさにそれは、それぞれがバラバラに機能するのではなく、互いに有機的に影響し合う円環的なシステムであり、生態学的(エコロジカル)な世界の広がりでもあるわけです。

(きたむらしんや 2012/8/20 脱稿)